

## 『霸王の愛する歌い鳥』

著：葵居ゆゆ

ill：羽純ハナ

顔を上げよ、と静かな声が降ってきても、アルエットは動けなかった。

隣にはアルエットが万が一にも逃げないように捕まえておく役の屈強な男が、前にはアルエットを連れてきた商人が跪いている。周囲には王への貢物が、たっぷりと積まれていた。金貨に宝飾品、絹の布に香辛料、酒の入った樽。

アルエットもまた、貢物のひとつだ。上半身は胸元だけを透けるほどうすい布で覆い、下半身は踊り子が身に着けるような、両脇が深く切れ込んだ布を巻いている。布をどければ股間が露出し、すぐに抱けるようになっていた。素足や腕には飾り環がつけられている。鉄でできた耳飾りと首飾りは重たいほどだ。

重みに負けるようにして、アルエットはいっそう深く俯いた。

できることなら、ハイダル王の顔を見たくない。会わずにすめばよかった、と思うが、アルエットには逃げることも、逆らうこともできないのだ。

命じられたとおりに王を殺すしか、道がない。

(――ユーエ)

祈るように弟を思い浮かべると、横の男が乱暴にこづいてきて、アルエットは躊躇いがちに視線を上げた。

白を基調にしたオルニス国王宮の広間は、随所に黒曜の飾りがほどこされ、華美ではないが荘厳な雰囲気だった。数段高くなった場所に玉座が置かれ、そこに座したハイダル王は金の模様の入った深い青の服を纏っていた。

歳は三十すぎだろうか。座っていても、長身で恵まれた体格だとわかる。豊かな黒髪、肌は明るい褐色、彫りの深い端正な顔立ちは、想像していたよりもずっと品があった。落ち着きと威厳とが、佇まいから感じられる。

(……この人が、ハイダル王)

砂漠のふちに位置する地域では、人の姿を絵に残すことは禁忌とされている。そのため、黒き霸王と呼ばれて周辺の国々で恐れられているハイダル王も、どんな容貌なのかをアルエットは知らなかった。

短期間で強国へのしあがったオルニス国を率いる若き王。苛烈で、アルエットたちにとって憎むべき仇なのだと聞かされてきたが、アルエットの目には恐ろしい人には映らなかった。むしろもの静かで、穏やかにさえ見える。

ハイダルはアルエットの、目立つ羽耳に目を留めた。

「鳥人——フウル族か」

「はい。ビルカ小国群のほうで歌娼として働いているのを見つけまして、わたくしどもで助けたのでございます」

アルエットの前で膝をついている商人が、流れるように嘘をつく。彼は親方——アルエットとユーエを拾って育てた、あくどい商人であるヤズの仲間だった。

焼け出されて行くあてもなかったのを拾ってくれたことには違いないが、ヤズはけっして優しくも親切でもない。美しい鳥人なら金になるから、と手放さなかったのだ。彼は手下を連れて国々を巡っており、道中では必ずアルエットにも「仕事」をさせていた。酒場で歌をうたい、値をつけた男に身体で奉仕する歌娼の仕事だ。拾われてから七年間、休みをもらえたことはない。もちろん、儲けを手にすることはできず、与えてもらえるのは自分と弟のわずかな食事だけだった。

「日頃より我々旅商を篤く保護していただいておりますお礼として、わたくしからハイダル陛下へ贈り物を献上いたしたく、このフウル族もお連れしました。陛下は鳥人がお好きと聞きましたので……ご覧ください。砂漠の宝石と称えられるフウル族にもめずらしいほど、美しい容姿でございますでしょうか？」

商人は振り返って、アルエットの顎を掴んだ。伏せがちの顔が上を向くように固定し、太い指で耳の飾り羽を撫でてくる。

「こんなふうには瑠璃色に鋼色、桃色、金色と、鮮やかに色のまじった飾り羽はめったにいないと聞きます。尾羽は桃色だけですが、長くて綺麗です」

「……っ」

服から覗く尾羽まで掴んで持ち上げられ、アルエットはかろうじて声を呑み込んだ。媚薬をいつもより多く仕込まれてきたせいで、肌も羽も過敏になっている。あげくに、後ろの孔には粘汁を入れられ、金属の栓で塞がれていた。

乱暴に掴まれた羽から伝わるのは鋭い痛みだ。いやがりすぎでは客が怒るからと、媚薬はよく使われるのだが、感覚が増幅されるだけで、快感が強まったことはなかった。腹の中の異物はごつごつして、ただ気持ちが悪い。

「たしかに美しいな。薄茶の髪の方族はほかにも見たことがあるが——目は翠か？」

はい、と嬉しげに商人が答えた。

「めったにいない、透きとおるような色をしております。もちろん声も可憐でございますよ。アルエット、一曲陛下にうたって差し上げなさい」

ほら立て、と小声で凄まれ、アルエットはふらつきながら立ち上がった。いらないと言われなしかと期待してハイダルを見つめ、じっと動かない視線にぶつかって諦める。

複雑な気分だった。気に入られなければ困るけれど、気に入られれば、きっと今夜自分は死ぬ。死ぬのはもう怖くないが、人を殺めるのは恐ろしいし、残される弟のことを思えば、どうしたって心は沈む。

それでも、深く息を吸って胸をひらき、アルエットはうたった。

——むらさきの花が砂漠に咲くころ

風が恵みを連れてくる

空からこぼれる贈りもの

朝にうまれて、昼はきんいろ、夕にあかがね

わずかに震えた声が広間の天井へとのぼっていく。甘やかで色気があると、どこの酒場でも人気のアルエットの歌声に、ハイダル王も聞きいるように目を細めた。でも、今日は声の伸びがよくない。沈んだ心も、過敏にさせられた身体も、完璧にうたうにはほど遠い状態なのだ。アルエットはつらく思いながら、どうにか最後までうたい終えた。

頭を下げて再び膝をつく。ハイダルは「いいだろう」と商人に頷いた。

「彼を受け取る。旅商は遠い異国との荷のやりとりには不可欠な存在だ。今後も誠実に仕事に励んでくれ」

「は、ありがとうございます」

恭しく頭を下げて蔑む笑いを隠した商人が、アルエットを置いて立ち上がる。計画どおりアルエットを受け取らせたことで、王を見下しているのだ。すれ違いざま、わかっているだろうな、と小声で言われ、アルエットは首飾りを握りしめた。

首飾りは細い木の葉をいくつも連ねた意匠だ。鉄製で、尖った先端はナイフのように使える。親方のヤズには、この鉄の葉を使ってハイダルを殺せ、と命じられてきた。ヤズが懇意にしている「さるお方」が、フウル族の現状に心を痛めていて、アルエットたち鳥人がかつてのような誇りと幸せを取り戻すには、ハイダル王を殺すしかないと決心したから、とのことだった。

「そのお方は正義のために、おまえに仇を討たせてくださると言うんだ。ありがたく思えよ」

アルエットと弟のユーエを床に座らせ、ヤズはふんぞり返ってそう言った。

「故郷を滅ぼした相手だ。おまえだって憎いだろう」

以前、フウル族は美しい湖のほとりに自分たちだけの小さな国を持ち、ひっそりと暮らしていた。西側のバラークート国と、かつて東側にあったクラーナ国に、愛鳥と称して人質を差し出して平和を守ってきたのだが、十数年前、南東から勢力をのぼしたオルニス国がクラーナ国を吸収し、状況が変わった。オルニスにも愛鳥を差し出すことにしたが、不要だと拒否され、そうして七年前、ハイダル王率いるオルニス軍に攻め入られ、滅ぼされてしまった。

このあたりの国々はほとんどが砂漠に接していて、どの国でも水は宝石に等しい資源だ。フウル族の湖からは川が流れ、近くの国も潤している。そのため、領土を拡大していたオルニス国に狙われたのだそうだ。

それを防ごうとしたのがバラークート国で、両軍が入り乱れて戦ったフウル族の里は、今はあとかたもなくなってしまっていると聞かされた。その場所で、ハイダル王はフウル族を「飼って」いるのだと親方は言った。

「奴隷や妾にするために飼ってるのさ。わずかな生き残りも辱めるような暴君を、おまえは許しておけるのか？」

おまえの親も殺した男だぞ、とヤズは言い、アルエットの隣でおとなしくしていたユーエの頭

を掴んだ。

「おまえがハイダルを殺してくるんだ、アルエツト。いやなら弟にやらせる」

そんな、と声を震わせると、ヤズは口答えするなと怒鳴りつけた。

「今まで誰が面倒みてきてやったんだ？ 食わせて育てて、稼ぎ方も教えて、今度は仇討ちを手伝ってやるって言ってるんだ。ありがとうございます、だろうが！」

唾を飛ばしてがなり立て、それからヤズはアルエツトの羽耳を掴んだ。

「ハイダルは鳥人の声や身体が好きらしい。おまえほどの見目と声なら必ず気に入られる。寝室まで連れていかれたら、しっかり奉仕して油断させろ。どんなに力自慢の暴君だろうと、射精の瞬間は気がゆるむ。そのときを狙って、首飾りで喉を裂けばいい。——弟を、幸せにしてやりたいんだらう？」

おまえがやってくれれば、ユーエはこれからも清らかな身体でいられるぞ、と囁かれ、アルエツトは愛する弟を見つめた。アルエツトによく似た、まだ少しだけ幼さが残る顔が、さびしげな表情を浮かべている。せめて彼だけは普通の幸せを手にするようにと、七年間、それだけを支えに生きてきた。国も親もなくし、アルエツトにはユーエしかいないし、ユーエにとって頼れるのもアルエツトだけだから。

わかりました、と頷くと、ヤズは放り出すようにアルエツトの羽耳を離れた。

「失敗するなよ。殺し損ねたら、次はユーエにやらせるからな」

「そんな——！」

「文句あるか？ おまえがちゃんと言われたとおりにすればいいだけだろうが」

睨まれれば言い返せなかった。アルエツトは不安そうなユーエを抱きしめて、悲しい気持ちを押し殺した。——ユーエには、させるわけにはいかない。

(僕が、やるしかないんだ)

周辺国におそれられているとはいえ、一国の王を殺せば、うまくいっても失敗しても、アルエツトは処刑される。だからもうユーエには会えないが、王を殺せたことが伝われば、ヤズはあと少し、弟の面倒をみってくれるはずだ。がめつくて乱暴で意地が悪い人だが、アルエツトたちを育ててくれたし、アルエツトが「自分が働くから、ユーエには客を取らせないで」と頼めば聞き入れてくれた。もっとひどい扱いを受けたフウル族もいることを、アルエツトはこの七年で知っていた。

フウル族も獣人の一種だから発情期がある。それが人間の欲をそそるらしく、戦争などで行き場がなくなった獣人は奴隷として売られることが多いのだ。西の山脈の向こうの帝国や、砂漠の反対側に売られないだけでも、自分たちは幸運だった。

ユーエは賢い子だから、ひとりでもきつとうまく生きていけるだろう。だが失敗すれば、自分が死ぬだけでなく、ユーエも身体を売らされ、王を殺せと命じられるのだ。

人を殺すなんてしたくない。父も母も、復讐を望むような人ではなかった。彼らが生きていて、アルエツトが王を殺そうとしていると知ったら、悲しい顔をして引きとめるはずだ。

でも、やるしかない。

鉄の葉を握りしめ、心の中で自分に言い聞かせていたアルエットは、いつまで経ってもハイダル王からなにも言われないのに気がついて、そろそろと顔を上げた。

「……！」

玉座にいとばかり思っていたハイダルは、いつのまにか数歩の距離にいて、こちらを見下ろしていた。ぎくりと強張ったアルエットに、かるく首をかしげる。

「顔が少し赤いようだ。汗もかいているな。体調がすぐれないか？」

「いえ、これは……」

媚薬を飲まされたせいだ、とは言えず、アルエットは隠すように頭を下げた。

「偉大な王様の前ですから……、緊張してしまって」

「そう言えと命じられてきたか？ 他国に伝わる俺は冷酷苛烈な男らしいからな、怯えるのも無理はないが」

「——そんなことは、」

怒らせたか、と背筋が冷たくなった。しかし、ハイダルは淡々とした態度のまま、「立つといい」と言った。

「部屋に案内する」

はい、と頷いておずおずと立ち上がり、アルエットは困ってしまった。ハイダルは背を向けて歩き出していたが、ほかには誰もいない。そういえばさっきから衛兵もいなかったと思い出し、思わず呼びとめた。

「あの……部屋で、お待ちしていれば陛下がいらしてくださるのですか？ それとも、どなたかが陛下のところまで案内してくださるのでしょうか」

「案内は俺がする」

ハイダルが振り返って手招いた。

「弟が熱を出しているから、侍従もそっちに行かせている。うちは使用人が少ないんだ」

使用人が少ない？ とアルエットは首をひねった。オルニス国は領土も広く、ハイダルの名は近隣に轟いているのに、王宮に仕える人が少ないなんて信じられない。

怪訝な表情を見てとったのか、ハイダルがわずかに笑みを見せた。

「ここは広いが、世話をしてもらわなければならないのは俺と弟の二人だけだ。掃除や雑用、食事のことだけやってもらえばいいのだから、大勢雇う必要はない。それより、市井でもっと重要な仕事をして、自分たちの暮らしを築いてもらうほうがいい」

ハイダルは背を向けると再び歩き出した。慌ててついていくと、広間を出て、中庭に面した廊下を進んでいく。小さなアーチをくぐり建物の外に出て、丸い屋根を持つ別の建物に入ると、ハイダルは部屋のひとつを選んでアルエットを中に入れた。

「当面はここがおまへの部屋だ。——そういえば、名を聞いていなかったな」

「アルエットと申します」

きっとここは後宮なのだろう。床は大理石を組みあわせてあり、天井はきらびやかなモザイクで彩られている。寝台は薄布で飾られ、優雅なかたちの長椅子やテーブルなど、ひとつおりの家

具も揃っていた。

「湯は使うか？ 身体を清めたいなら湯室に連れていくが」

ハイダルが寝台のそばで振り返り、アルエットはかあっと赤くなった。

「いえ……じ、準備はしてきました」

後ろの孔は粘汁を入れて栓をする前に入念に洗わされた。湯浴みをしても栓を外すわけにはいかないから、このまま行為に及ぶほうがいい。

「よろしければ、まず口でご奉仕をさせていただきます」

彼の前で跪くと、ハイダルは深くため息をついた。

「やはり、夜伽をしろと言われてきたんだな。娼婦のような格好もそのためか」

うんざりしたような口調だった。アルエットは不興をかわないよう、すぐにハイダルの服の裾に口づけた。

「ハイダル様は商人たちにとっても特別な王ですから、しっかりお仕えするようと言われてきただけです」

「どうせ、色好みのくせに後宮の人間をすぐに追い出す暴君だとでも言われたんだらう。遊ぶばかりで世継ぎも作らないと、オルニス国民にも言われているくらいだからな」

「いえ……そんな」

アルエットは返事に困って口ごもった。アルエットが知っているハイダルの噂はもっとひどい。精力が強く一度に何人も相手にするくせに、冷淡で情をかけることはない。だから後宮から追放された者は、男にしる女にしる、詳しいことはなにも言わないのだそうだ。後宮に召されたはずなのに行方知れずになる者もいて、殺されたに違いないと親方は言っていた。

他国を征服して強大になった武国の霸王であり、傲慢で人を人とも思わない、残忍な性格なのだと教えられたのを、アルエットは信じていた。まだ子供だったとはいえ、国が滅ぼされたのは七年前だ。忘れるには記憶は鮮明すぎた。

燃える家々。悲鳴、入り乱れる足音と蹄の音、武器のぶつかる音。緑の木々が裂けて倒れる音。黒い鎧をつけ、笑いながら建物を壊したり、逃げるフウル族を追いかけていた男たち。

あんな悲劇を引き起こした張本人なら、恐ろしいに決まっている。

(でも……)

直に会ったハイダルは、思い描いていた暴虐な王には見えない。

見えないが、いい人そうだからと信じることもできかねて、アルエットは裾に口づけたまま迷った。もしすごくいい人でも、王は王だ。フウル族の土地が欲しいから攻め入ったのだし、事情を話しても、ハイダルが弟を助ける理由がない。仮に助けると言ってくれたとしても、アルエットが失敗したことが伝わってしまえば、ヤズはかわりに弟に仕事をさせようとする。

(……やっぱり、言われたとおりにするしか——)

ハイダルがすっとかがみ込み、俯いていたアルエットの顎を掬った。

「湯浴みの必要がないならもう寝ろ。それとも、なにか食べたいか？」

ずいぶん寛大な言葉だったが、要するに夜伽をさせる気がないのだ。アルエットは数秒迷い、

思いきって下肢を覆う巻き布をずらした。太腿をぎりぎりまで晒し、小声で告げる。

「すぐに……その、使っていただけるようにしてまいりましたので、どうか」

言えば後戻りはできない、と思って声が途切れた。言わなきゃ、と内心で己を叱咤する。抱いてくださいませと頼んで、気持ちよくなってもらって——殺す。

顎を持ち上げられたまま視線を逸らすと、ハイダルが再びため息をついた。

「そうか、顔が赤いのは媚薬のせいだな。乳首が目立つ」

指摘され、ぱあっと身体が熱くなった。透ける布はぴったりと肌を覆っている。肌が見えるだけでなく、つんと尖った乳首が布を押し上げているのも見えるのだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>